



Title	「生活者」としての若年ワーキングプア：貧困の理解と把握の深化のために
Author(s)	横尾, 昌弘
Citation	教育福祉研究, 0016, 1-13
Issue Date	2010-03-29
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46807
Type	departmental bulletin paper
File Information	Yokoo.pdf



「生活者」としての若年ワーキングプア —貧困の理解と把握の深化のために—

横 尾 昌 弘

はじめに

日本において「貧困」という言葉から人々が表象するのは、「依然として、『食うや食わず』の極貧あるいは絶対的貧困概念」である（青木 2007；197）。それは、「先進国の貧困」が、容易には理解できるものではないことを示している。たとえば「住む家を持たない」ことは貧困であると多くの場合言えるとしても、大切な友人を持つ、自分の好きなことに打ち込む、健康でいる、オシャレをする、結婚をして家族を持つ、といったことを望んでも手に入らないとき、果たしてそうした状態は貧困なのだろうか、その判断は分かれるだろう。近年の高まる貧困率が示しているのは、最低限の生活を保障されることなく生活を余儀なくされている人がすでに多く存在しているという事実であり、こうしたなか、あらためて社会的最低限の生活を保障することが問われているが、その「内容」についてはいまだ明確な答えは出ていない。

しかし、そもそも貧困にある（とされる）現実の「生活」は、これまできちんと把握されてきたのだろうか。貧困率の捉えた貧困層の「実態」は、賃金や雇用形態などを統計で示すことで捉えられているにすぎない曖昧なものではないだろうか。貧困の理解や把握の「材料」の提供において、“貧困の具体像”をもっとリアルに描けるのではないか。

1. 研究の視角と調査の概要

このような問題意識から、「生活」「家計」「余暇」「健康」という三つの側面からアプローチし、貧困にある若者（若年ワーキングプア）の生活を

描いてみようと思う。ワーキングプアは、賃金や雇用形態といった「労働」が中心に把握されてきたが、「生活者」として彼らの生活を捉えるにはなるべく生活を立体的に見ることが重要であり、この三つの側面を設定した。また若者に着目するのは、雇用や家族の流動化の影響を最も受け、これからの社会を体現している層であると考えためである。

以上の点を踏まえ、ワーキングプアにあたる「フリーター」の若者10名にインタビューを行った¹⁾。なかでも社会階層の低位にあることを見込んで、学歴は高校卒または専門学校卒の者に限定した。また、「貧困ラインのわずかに上かわずかに下」に位置するワーキングプアを対象とすることで、貧困の奥深さを捉えようとした（シブラー 2007）。なお、家計をほとんど聞けなかった1名（E）は4章のみ考察の対象としている。対象者は、筆者自身が以前アルバイトをしていた際の直接の知り合いとその友人、または筆者の友人のアルバイト先の者と、その友人である。2009年8月～11月にかけて、ひとり1時間半～2時間程度のインタビューを行い、対象者によっては30分～1時間程度の追加調査も1～2回行った。性別と年齢には、大きく偏りが生じた。男女の構成では、男性3名、女性7名となり、男性は25歳、28歳と30歳、女性7名は全員20歳代前半（22～25歳）となった。居住形態は、親同居が6名（うち、母子世帯が2名）、ひとり暮らしが4名（うち、恋人と同棲が1名²⁾）であった。表1に、彼らの基本属性を整理した。表の並びは、上から、家庭の経済的困難度が高いと思われる順となっている。このうちHとLについては、インタビュー時点のものではないこ

表1 対象者の基本属性

I D	性別	年齢	学歴	仕事 (形態)	実収入 (ボーナス)	居住	健康	親職業	家族の困難
A	男	28	高校	飲食店 (バイト)	17-8万 (なし)	同居 (母子)	良好	父：死別 母：無職	借金 父：死別 母：糖尿病
H	女	24	専門	美容関係 (アルバイト)	13-4万 (なし)	同居 (母子)	良好 (肝臓)	父：離別(土木) 母：電気屋	借金 父：離別
K	女	25	高校	インターネット カフェ (アルバイト)	10万 (なし)	ひとり	良好	父：無職(農業) 母：農業手伝い	父：無職(脳梗塞) 兄：自閉症(施設入所)、 姉：自閉症(施設入所)
L	女	22	専門	コールセンター (アルバイト)	11-3万 (なし)	ひとり	良好	父：自営業 母：自営手伝い +介護(パート)	母：再婚 (父親：30代)
G	女	24	高校	スーパー (パート)	6、7万 (なし)	同居	重い 喘息	父：建設 母：パート	きょうだい5人
E	男	25	高校	建設 (見習い)	30万 (なし)	同居 (父)	良好	父：建設 母：パート	きょうだい5人 妹：重い喘息
C	女	22	専門	コールセンター (バイト)	10-15万 (なし)	同棲	良好	父：経営 母：主婦(パート)	親子間の不和 母：散財癖
F	女	21	専門	飲食店 (バイト)	10-12万 (なし)	ひとり	良好	父：削蹄業 母：主婦	母：糖尿病・脳に病気
I	女	24	高校	警備員 (正規)	15-6万 (少額)	同居	良好	父：飲食店 母：パート	自営業の飲食店 閉店
J	男	30	専門	服販売員 (準社員)	14-5万 (なし)	同居	良好	父：自営業 母：パート	

とを断っておく³⁾。

2. 家計の「営み」

—「不安定な家計」と生活設計の困難—

まず、彼らの「家計」を見る。ワーキングプアの若者たちを「生活者」として捉えたとき、たとえ親からの援助や社会保障による手当てを受けていたりするにしても、家計の営みが生活の基盤としてある。ここでは、多くの家計調査のように、いわば生活の結果としての家計費を見るのではなく、文字通り家計の「営み」を捉える。こうした視点から家計を見ると、彼らの「不安定な家計」ともいえる状況が浮かび上がる。

(1) 絶対的な低賃金、変動する収入

まず第一に、彼らの収入の圧倒的低さが、彼らの家計を大きく制約する。しかし、収入の低さにくわえ、「収入の変動」が生じることで家計は一層不安定なものとなっている。当然、病気等で仕事

を休めばその分の収入は減るし、仕事を変えれば(やめれば)大きく変動する(途切れる)。だが、次の語りに見られるように、同じ職場で働いていても収入は変動する。月1、2万の変動は当たり前であるが、5、6万の変動も珍しくない。こうした状態では、少しの支出、あるいは少しの収入の変動が家計に大きな影響を与える。

*事例J (30歳、男性)

【収入14-5万：服販売員準社員】

「今(の収入)は、10、4、5万……。」

(—それは月によって、いくらか上下したりしますか?)「そうだね。忙しいときと暇なときで、1、2万、差はある。」「(でも)前よりは(余裕がある)。……やっぱり準社員になって。それまでは10万ってなかった。苦しかった。」

*事例F (女性、21歳)

【収入11-12万：飲食店アルバイト】

(—現在の家計のなかで、何が一番負担でしょうか? 「これがなければ」というものはありますか?) 「ああ……そうやっていってしまったら全部ですね。」 「……何がなければじゃなく、持ってる少ないやつをどうしようか、みたいな……。」

(2) 生活のうえでのさまざまな費用、困難な生活設計—短期的に消えるわずかな貯金、なくならない負債—

低収入で「不安定な」家計にあっては、ようやく貯めたわずかなばかりのお金であっても、何らかの必要な出費やたった一度の贅沢で消えてしまい、あるいはたった一度の贅沢のために貯めたお金も、なんらかのアクシデントが生じれば刹那的に消えてしまう。そしてそうした家計は、「負債」とも隣り合わせである。

1) 家電の購入、旅行

家電の購入や旅行などは、彼らの生活のなかで必要な場面であると同時に、比較的大きな出費を余儀なくされてしまう。Aは、地デジ対応に切り替わることを機に、10万のテレビを購入していた。しかしこれは、引越しをするために貯めていた貯金であった。なんらかの目的のための「短期的貯金⁵⁾」すら、その目的通りに貯めることは難しいことがよく現れている。他の事例では、テレビについては購入の目処も立っていない。

旅行も比較的大きな出費が伴う。Fは対象者のなかで唯一年1回のペースで、(これも唯一)道外へと旅行に行くことができていた。しかし、彼女の「自由裁量部分」は月3万程度である。彼女の場合、交際費や衣服に関する出費などが極端に少なく、食費でさえほとんどかかっていない、ということだった。そうやって旅行のための「短期的貯金」を捻出していた。しかし、それだけ何も出費をしなくても、残るのはわずかである。ようやく貯まったわずかなお金も、文字通り短期的に消えていくのは、彼らの家計にあっては当然の結果なのである。

*事例F (女性、21歳)

【収入11-12万、飲食店アルバイト】

(—それだけ普段何も出費なかったら、最大で2、3万は残る……?) 「2、3万……いや、3万は残らないですね。……2万……頑張って、2万5000とか……。そんなにいけないかな……。」 (—……現在の貯金について、満足はできていますか?) 「……いやあ……どうなんだろう……でも、(旅行で)東京に行く前は、(貯金を)頑張ったと思ったんですけど、東京に行ったらやっぱ、遊ぶじゃないですか。でなんか、あまた頑張んなきゃ、みたいな。いつまでかかるんだろうみたいな。」

2) 付きまとうリスク、結果としての生活設計の困難

病気や失業は、不安定就労にある彼らにとっては「身近」なリスクである。彼らは、仮に仕事を1週間休めば、1ヶ月の収入の4分の1が消えることを意味する。体調を崩せば医者にかかる必要がある。十分な休養と栄養も望まれる。しかし、どちらもお金がかかる。結果として、自分の力で家計を営むことは困難になり、「親からお金を借りる」という「負債」として残ることになってしまう⁶⁾。こうして、もともと少ない収入も変動が大きく、少しの大きな出費やリスクが家計を脅かし、結局は、生活設計を見込んだ中・長期的な貯金や保険料の支払いはままならず、他方、負債やローンはなくなるのである(表2~4)。

*事例L (22歳、女性)

【収入11-13万：コールセンターアルバイト】

(—これまで、体調とか崩されてしまって、お給料がその月に、がくっと下がってしまったこととかは、ありますか?) 「はい。」 (—やっぱりそういうときは、親に頼らざるをえない……?) 「そうですね……。」 (—そのときの収入はどれぐらいになってしまいましたか?) 「10万いかなかったです……。」

表2 各種保険の状況

ID	性別	年齢	健康保険	雇用保険	年金	未加入・未払期間
A	男	28	あり	あり	あり	あり
H	女	24	あり	あり	あり	あり
K	女	25	あり(減額)	—	あり	あり
L	女	22	(親)	なし	(親)	あり
G	女	24	扶養	—	免除	あり
C	女	22	扶養	なし	なし	あり(全期間)
F	女	21	扶養	なし	(親)	あり
I	女	24	あり	あり	あり	あり
J	男	30	扶養	—	—	あり

注1:「—」は不明を表す。以下の表でも同様。

注2:薄い網掛けは、生活に不安定をもたらすと思われる場合。その傾向が強い場合、濃い網掛けをした。以下の表でも同様。

表3 貯金の状況

ID	性別	年齢	貯 金				
			額(月)	定期的な貯金	ボーナスによる加算	貯金用の口座	貯蓄0期間※1
A	男	28	0	なし	なし	なし	あり
H	女	24	0	なし	なし	—	あり
K	女	25	0	なし	なし	あり	あり
L	女	22	0	なし	なし	なし	あり
G	女	24	0.5万	あり	なし	あり	あり
C	女	22	0	なし	なし	なし	あり
F	女	21	0-2万	なし	なし	なし	あり
I	女	24	2万+ α	あり	少額	なし	あり
J	男	30	0	なし	なし	なし	あり

※1:学卒から現在までの期間で、貯金と呼べるほどの貯金がなかった期間。

表4 ローン・負債

ID	性別	年齢	ローン・負債	
			現 在	その他、これまで
A	男	28	なし	なし
H	女	24	学費、車の免許(ローン利用)	同
K	女	25	生活費(親から、たびたび)	生活費(親から、たびたび) バッグ(ローン利用)
L	女	22	生活費(親から、たびたび)	学費、引越し(ローン利用)
G	女	24	なし	着付けの資格取得(ローン利用)
C	女	22	引越し(恋人から)	生活費(親から、恋人から)
F	女	21	生活費(親から、たびたび)	同
I	女	24	なし	なし
J	男	30	学費、生活費(ローン利用)	同

*事例J (30歳、男性)

【収入15-6万：服販売員準社員】

(一現在、貯金はできていますか。)[できてないね。](一……なかなかできない。)[うん……できんこともないけど。](一毎月決まった額、というのは難しい……?)[貯金するよりは、借金の返済多くして、(そっちを)早く終わらせたい?]

3. 生活のなかの「余暇」

—「厚み」のない生活—

次に見るのは、生活のなかの「余暇」である。先に、生活の基盤である経済的側面＝不安定な家計が、生活そのものを不安定なものとしている様子を確認した。不安定な生活の基盤は、生活の他のさまざまな側面にいかに影響を及ぼしているのか。

(1) 不規則で少ない休日、減ってしまう友人との交際—休みが合わない、取れない—

まず余暇としての「交際」を見るが、若者のネットワークについては、その「機能」に着目されることが多い(内田2005、乾ほか2007など)。しかしここでは、まず休日のあり方を確認することで、ネットワークがどんな機能を持つにしろ、そもそもそうした友人関係を維持できる環境にあるのか、という点を見る。

休日について、土日・祝日を暦通りに休みを取れるという者は0例であった(表5)。基本的に仕事が休みなのは土日以外であると同時に、その休み自体も不規則であり、友人と休みが合わないことをうかがわせる。また、彼らの周囲の友人の休日の状況も似た環境にあることも考慮に入れる必要がある。こうして、彼らの「交際」の様子は、「まちまち」であったり、減っていつてしまう様子が見られるのである(表6)。また、Hの語りからわかるのは、休みが「合わない」ことにくわえ、低収入から生じる、休みを「取れない」(休みの少ない)状況である。さらには、休日の不規則さ・少なさにくわえ、「まとまった休日(長期休み・連休)」のないのが、彼らの休日に関しての特徴である。GWなど暦どりの連休はもちろん、その他の連休も、ほとんどない(表5)。

*事例H (24歳、女性)

【収入13-14万：美容関係アルバイト】

(一昼間仕事をしていたときは、よく友人とかと遊びには行っていましたか?)[行っとなーい。昼仕事してたときが、まず、月に基本休3日しかとらないんだよね。休みとるのがまず無理だから、遊べないし、結局平日休み多いから、友達減って……。]

*事例F (女性、21歳)

【収入11-12万：飲食店アルバイト】

表5 休日、長期休みの状況

ID	性別	年齢	土日・祝日	GW	お盆	シルバーウィーク	年末年始	その他 3日以上 の連休
A	男	28	不定期	なし	なし	なし	2-3日	・数えるほど ・秋口に3-4日
H	女	24	不定期	なし	なし	なし	なし	数えるほど
K	女	25	不定期	なし	なし	なし	なし	月1程度
L	女	22	不定期	なし	なし	なし	2-3日	なし
G	女	24	なし	なし	なし	なし	なし	月1、2回程度
F	女	21	不定期	なし	なし	なし	2-3日	数えるほど
C	女	22	不定期	なし	なし	なし	なし	数えるほど
J	男	30	不定期	なし	1週間程度	なし	なし	・数えるほど ・1月に1週間程度
I	女	24	なし	なし	なし	なし	なし	ほぼなし

表6 交際の状況

ID	性別	年齢	交際費	交 際			
				家族	恋人	友人	職場
A	男	28	1万以内	多	—	少	少
H	女	24	1万以内	—	—	少	多
K	女	25	1万以内	少	—	まちまち	なし
L	女	22	1.5—2万	少	多	定期的	なし
G	女	24	1.5—2万	多	—	減	なし
C	女	22	2万	少	多	定期的	なし
F	女	21	0—2万	多	—	減、まちまち	減
I	女	24	2万	多	—	少	定期的
J	男	30	2—3万	—	—	定期的	定期的

注：「恋人」の項目での「—」は、インタビュー時点で恋人のいないことを示す。

「友達と、休みが合う日とかわかんないじゃないですか。定休じゃないんで、向こうも定休じゃないんで。休みが合ったら、遊ぶみたい。こっちもあんまり休みがなかったり、向こうもなくなったりとか。……(よく遊んでいた)友達が、仕事始めて、両方とも。遊べなくなったんで。それも、あります。」(一以前までは、よく遊んでいたのですか?)「遊んでたっていうか、……遊んでくれる友達がいたから、まだ出歩いたり、するじゃないですか。……(最近)ほんとに家に引きこもるように……。」

*事例A (28歳、男性)

【収入15—6万：飲食店アルバイト】

「でも交友関係なんておれ、バイトしかないからさあ。」「……(高校の同級生は)今の携帯の番号、知らないよ。」

(2) 旅行

次に、こうした不規則で少ない休日、取れない

まとまった連休という状況のなかで、十分な休息、たとえば「仕事のことを忘れ存分に遊ぶ」といったことができているのか、という点を確認する。判断の基準は多様だが、ここでは「旅行」と「趣味」に着目した。「旅行⁸⁾」について、ここ2年間における回数と、それを日程別に分けて整理したのが表7である。年1回程度旅行へ出かけることができているのは2例のみ、ここ2年間で2泊以上の旅行をしたのは1例のみである。一方「趣味」を見ても、その乏しさが目立つ(表8)。

*事例I (24歳、女性)

【収入12—13万：警備員正規雇用】

(一休日の過ごし方についてですが、最近少し遠出などはされましたか?)

「最近……ないですねえ……。」(一ではここ1、2年ではどうでしょうか。)[「……ないですねえ……(笑)」(一旅行などは、あまり好きではないのですか?)「そうですねえ……友達と、行こう行

表7 旅行

ID	性別	年齢	回数	日帰り	1泊	2泊以上	ID	性別	年齢	回数	日帰り	1泊	2泊以上
A	男	28	—	—	2回	なし	C	女	22	なし	なし	なし	なし
H	女	24	なし	なし	なし	なし	F	女	21	2回	なし	なし	2回
K	女	25	3回	1回	2回	なし	I	女	24	なし	なし	なし	なし
G	女	24	—	—	なし	なし	J	男	30	1回	なし	1回	なし
L	女	22	1回	なし	1回	なし							

表8 趣味に関する出費（旅行を除く）

ID	性別	年齢	趣味に関する出費	趣味に関する最近の大きな出費
A	男	28	DVD レンタル、コーヒー	ゲーム機
H	女	24	—	特になし
K	女	25	DVD レンタル、カラオケ	特になし
L	女	22	カラオケ	特になし
G	女	24	特になし（家事）	特になし
C	女	22	スポーツジム、雑貨（100 円均一）	特になし
F	女	21	特になし	特になし
I	女	24	お菓子作り、 お菓子教室（2 年前まで）	ジッポ（1 年に 1 個）
J	男	30	プラモデル	特になし

こうとは言ってるんですけど……。」

う、これといって、とくにないので……。」

＊事例 H（24 歳、女性）

【収入 13－14 万：美容関係アルバイト】

（一最近の休日や連休に、旅行に行きましたか？）「旅行行っとなーい最近。でも温泉旅行行こうかって来月一、話はしてる。」「……以前行ったのは、3、4 年ぐらい前かなー。ぜんぜん行ってない。」「……（以前の仕事をしていたときよりは）今の方がある。出かけることは。だけど、旅行とかは、行かないかな。」

＊事例 L（22 歳、女性）

【収入 11－13 万：コールセンターアルバイト】

（一ではこのなかで、1 ヶ月のうち、趣味などに使うお金はありますか？）「趣味が……なんだろ

（3）余暇としての「消費」—衣服・美容—

最後に、余暇としての「消費」に着目する。生活のなかで、たとえば疲れがたまったときに「自分へのごほうび」としていつもより高価な買い物をする、あるいは休日に「オシャレ」をする。このように、消費には息抜きや気分転換を手軽にもたらし側面があるといっているだろう。今回の対象者は女性が多くを占めたが、ここでは消費のうち、女性にとって関心を占める割合の大きいと思われる「衣服」「美容」に着目する（表 9）。衣服・美容に関する出費では、「最近はちょくちょく買う」「（この前）4 万のジャケット買った」（J）と

表9 衣服・美容に関する出費

ID	性別	年齢	衣服（アクセサリ・バッグなど含む）や美容に関する大きな出費（最近 2 年）	衣服・美容にかんする 1 ヶ月の出費（語り）
A	男	28	—	—
H	女	24	特になし。	ほぼなし。
K	女	25	特になし	現在はほぼ 0
L	女	22	服：特になし 美容：不明	服：3、4 ヶ月で 1 万程度 美容室は、2、3 ヶ月に 1 回利用する
G	女	24	特になし	1 万超えないようにしている
C	女	22	美容：パーマ（去年） 服：2 年前に、毎月 3 万円	5000 円以内 美容室は、「安いところを利用している」
F	女	21	まとめ買い（1 度）	服：普段は一切買わない 美容室はほとんど行かない
I	女	24	特になし	2、3 ヶ月に 5000 円程度 髪はあまりいじらない
J	男	30	ジャケット（4 万）	月 1、2 万程度

いう者も当然いる。しかしJの場合、それでも「衣服に関し2年間で大きな出費」が4万のジャケットのみであるし、他の事例の多くが、衣服・美容に関しまともに出費できていない。誰もが関心をもつような事柄への消費がままならないことは、彼女たちにとって意味の小さくないことであるだろう⁹⁾。

*事例K (25歳、女性)

【収入10万：インターネットカフェアルバイト】
(一衣服に関する出費は、ひと月どれくらいになりますか?)「今は、ぜんぜん……。ほぼ0円ですね。……昔の服とか着てますね。」(一衣服に関して、最近で大きな出費というのは。財布とか、靴とかでもいいのですが。)(「最近はないですね……。」「やっぱ、買えないので……我慢してます。」

*事例I (24歳、女性)

【収入12-13万：警備員正規雇用】
(一衣服に関する出費をお聞きしたいのですが、ひと月どのくらいになりますか?)「衣服……あたしあんまり服とか買い物をしてない……。」「そうですね……。数ヶ月に、5千円いかないくらいですね。」(一靴とかバッグとかアクセサリーとか、そういうのを含めても、そのくらい。)(「……はい。」「(一……では、そうした財布とか服とか含めて、ここ1、2年でいいのですが、何か大きな出費をされましたか?)「……んー……特にないですね……。」

4. 健康—蓄積される「無理」—

低収入で不安定な家計は、生活そのものを不安定なものとすると同時に、生活から「厚み」をも奪った。最後に確認するのは、そうした生活にある彼らの「健康」である。社会・経済的要因と健康との関連については、近年では社会疫学の領域で研究が進められ、社会経済的格差による「健康格差」が実証的に明らかにされつつある。だが、社会経済的格差と健康に関する研究には高齢期のものが目立つ(平岡2001、近藤2007など)。しか

しその影響は、若者期(あるいは幼少期)からの蓄積の過程も、認識され、把握される必要があるだろう。「移行」論における先行研究においては、資源の乏しい若者たちが労働の問題によって肉体的・精神的に異常をきたしていく様が質的調査によって指摘されている。だが、それは「健康」の問題として意識されているよりも、むしろ「尊厳の否定」「承認の欠如」といった精神的な問題に収斂してしまっている(乾ほか2007など)。しかし、これはもはや「尊厳」ではすまない問題である。

表10に、健康被害を整理した¹⁰⁾。ここで強調しておきたいのは、たとえば「過労で1週間寝込む・入院する」といった経験を挙げてあるが、そうした経験は、「そのとき・その場面だけの経験」ではなく、むしろ彼らの日常生活におけるささいな「無理」の積み重ねの結果である、という視点である。就労以外に着目する彼らの不規則な睡眠・疎かな食事といった場面は、たしかに、不安定就労層に限ったものではないかもしれない¹¹⁾。また「若者」というライフステージでは、多少の無理は利くであろうし、そうした無理を乗り越えてこそ得られるものがある¹²⁾、ということもあるかもしれない。しかし彼らの不安定な生活にあっては、日常的・慢性的な小さな「無理」は「蓄積」される。その蓄積をやわらげるような何らかの「支え」にも乏しい。「無理の蓄積」は、長期的な視野に立ったときには決定的な差となっていくことだろう。表に挙げたような目に見えるまでの健康被害は、直接は「就労」(過労や精神的ストレスなど)による困難がきっかけとなっていることが多いが、以下では就労の問題(すでに十分過酷であるが)だけでなく、就労の過酷さが日常生活に及ぼす影響や、その上にさらに重なっている別の困難(家庭の困難や不安定な家計、余暇や社会関係の乏しさ)との関連を重視する。

(1) 食事への影響

—日常生活にまで及ぶ労働の影響—

不規則な時間帯、そして立ち作業の多い労働は、就労以外の生活の基本的な場面にも影響を与える。交際や休日の乏しさはすでに述べたが、ここ

表 10 労働の状況

ID	性別	年齢	仕事 (形態)	月収 (ボーナス)	健康	週の労働時間	過労・その他の経験
A	男	28	飲食店 (バイト)	17-8万 (なし)	良好	10H×6 (深夜まで)	4日間寝込む(過労)
H	女	24	クラブ (アルバイト)	30-50万 (なし)	良好 (肝臓)	9,10H×5,6 (朝方まで)	1週間入院(肝臓と過労)
K	女	25	インターネットカフェ (アルバイト)	10万 (なし)	良好	6H×4,5 (夜勤)	1週間寝込む(過労)
L	女	22	コールセンター (アルバイト)	11-13万	良好	8H×4,5	3~4日出勤できず(度々) (ストレス)
G	女	24	スーパー (パート)	6,7万 (なし)	重い喘息	6H×3,4	半年間療養 (ストレスによる病気)
E	男	25	建設 (見習い)	30万 (なし)	良好	12H×6	入院(過労)
C	女	22	コールセンター (バイト)	10-15万 (なし)	良好	12H×5,6 (深夜まで)	入院(過労)
F	女	21	飲食店 (バイト)	10-12万 (なし)	良好	6H×6 (深夜まで)	
I	女	24	警備員 (正規)	12-13万 (少額)	良好	8H×5 (夜勤あり)	
J	男	30	服販売員 (準社員)	14-5万 (なし)	良好	—	

注：Hの仕事が「クラブ」となっていることに関しては、注釈10参照。

で確認するのは、食事への影響である。ひとり暮らしで食事をきちんと作ることは困難が伴うことは容易に想像できるが、彼らの少ない収入では、手軽に外食で済ませる、あるいは気分転換においしいものを食べる、ということにも経済的な制約が付きまとうであろう。

*事例L (22歳、女性)

【収入11-13万：コールセンターアルバイト】
(一現在、普段の食事は、十分摂れていると思いますか?)「……仕事を変えたばかりだっているのもあるので……まあ、家で食べてるんですけど、きちんと摂れてる、というわけでは……。」
(一食欲が出ない……?)「仕事で疲れて……はい……食欲がないですかね……。」

(2) 家族の問題

—プライベート、休息のないAの生活—

特に母子家庭の場合、子どもに負担が重くのしかかる事例が多いことが、先行研究からも指摘されている¹³⁾。Aの母親は、糖尿病を患っている。A

は週60時間近い労働¹⁴⁾にくわえ、母親の食事の管理も担い、さらにはサイクリングなど軽運動にも付き合っていた。母親が糖尿病を患ってからはまだ目に見える形で体調を崩すにはいたっていないものの、彼の生活の様子を聞けば、「無理」の蓄積は明らかである。1日の様子を語ってもらった。

*事例A (28歳、男性)

【収入15-6万：飲食店アルバイト】

(一Aさん、いったいどんな1日を送っているのですか? 言ってみてくださいませんか? こんな一日だっているのを。何時に起きて、何時に……みたいな。)「……まず(午前)11時くらいに起きて、だいたい11時ぐらいにメシ作って、12時に食べ終わってから、夜(ご飯)の仕込みして、それ終わったらバイト行くでしょ。で、2時からバイト。」「……で、(夜の)11時半に帰ってきて、でちょっと一休み、して、メシ作って……、(あとは)たまに夜中に出かけたり。」「で、まあ、だいたい(朝方)6時に寝るけど、3時、4時に寝るときもあるし、7時に寝る時もあるし。

そんな感じ。」

(一夜中出かけるっていうのは?)「コンビニ。レンタルショップとか。」「立ち読みしたり。あと、DVD 借りたりとか。」

(3)「不安定な家計」と健康

不安定就労層の劣悪な労働環境は、もはや「常識」でさえであるかもしれない。働いても働いても貧困から抜け出せない、それがワーキングプアとして認識が広まっている。だが、その「常識」から彼らの生活がどれだけ見えているのだろうか。不安定就労者たちは、たとえば仕事を「掛け持ち」することで「低収入」からある程度脱することができ。しかし、「低収入」からの脱出は、不安定な家計からの脱出も意味しているのか。ここで見るCとKはこれまで、収入20万程度という家計に余裕の持てると思われる時期と、10万前後という生活にぎりぎりの時期をどちらも経験している¹⁵⁾。彼女らの経験から、「不安定な家計」が必然的にもたらしているひとつの状況を示す。20万程度の収入を得ている時期は、彼女たちにとって家計に余裕があり、充実した生活を送っていた様子が語りから伺える。

*事例C(女性、23歳)

【収入10-15万：コールセンターアルバイト】
「……2年前ぐらい……下着とか、なんか月3万って決めて、下着って決めたら下着とか、靴っていったら靴とか。そんな感じで(毎月)3万、3万とか(買ってた)。」「パチンコ屋のときとか。居酒屋のときは、20万近くあったから、余裕あった。」

*事例K(25歳、女性)

【収入10万：インターネットカフェアルバイト】
(一その頃も貯金ができていなかったというところ。……)「うん、そうですね。なんか服とか買ったりしてました。」「……服とか、化粧品とか、あと……温泉とか岩盤浴とか、行ったりしてました。あと整体とか。」

しかし、掛け持ちや労働時間を増やすことで20万という収入を得ることは、端的に「働きすぎ」を意味する。彼女らは、「働きすぎる」ことで、ようやく十分な消費を享受した¹⁶⁾。だが「働きすぎ」は、生活に「無理」をもたらすことは明白であるし、「働きすぎ」でも月20万程度の実収入にしかない¹⁷⁾。

*事例C(女性、23歳)

【収入10-15万：コールセンターアルバイト】
(一じゃあ……月に20何万とかもらえてたけど……。)「睡眠時間が、がくと減った時期かな。」
(一それだけ働いても、もちろんボーナスは、ない。」「ない。アルバイトだから。」「(一もう、その生活はしたくない?)「いやー……今そっちに戻りたいって感じ(笑)」

(一……Cさんは、自分で体力ってある方だと思う?)「あるけど……人並みですよ。……なんか、朝10時からとかで、夜中の3時4時まで働いてたらさすがに身体壊します(笑)」

*事例K(25歳、女性)

【収入10万：インターネットカフェアルバイト】
(一1週間も寝込んでしまうほど働いていたんですね……。)「うーん……仕事でも眠くて……ほんと、トイレで座ったりとかしてました……(笑)」(一それでも、いま、収入が少ないのもっと働きたいっていうのは。」「ああ、もちろん、はい。」「(体調に関しては、)心配してても、仕方ないですね……。」「……若いうちしか、できないですし……。」

(一Kさんは、ご自分で体力のある方だと思いますか?)「思いますね。体調崩してるんですけど、すごい、体力には自信あります(笑)」(一それでも、きつかった。」「きつかった、眠かったです。」

「ひとまず」の成立にあるワーキングプア的生活—おわりにかえて—

大切な友人を持つこと、自分の好きなことに打ち込むこと、健康でいること、オシャレをするこ

と、結婚をして家族を持つこと。こういったことを、望めば手にすることができる生活、それが「まっとうな最低限」ではないか。貧困の表象が「絶対的貧困」にあるとき、こうした生活は「まっとうな最低限」ではなく、保障すべき最低限度の生活をはるかに超えた「贅沢」とみなされてしまう恐れさえある。本研究は、「まっとうな最低限」の「内容」をひとつひとつ吟味しようとしたものではない。その前に、「貧困ラインのわずかに上かわずか下」に位置する現実の「生活」を把握し、議論をここから始めることが重要である。

ここに登場した貧困にある若者たちは、強くもあり、弱くもある存在であった。絶対的に低賃金で、その低い収入すら変動し安定を欠くような脆い生活基盤のなか、「ひとまず」にすぎないかもしれないが、「何としても」生活を成立させていた。それはラウントリの言うように、「彼らは現在、餓死の状態に置かれてはいない。しかしながら、栄養価値のある食物を十分にとることは許されていない。……また、表面的には一応の体裁を保っているが、それは簡単には、ことばでいつくせぬような不断の注意と工夫(やりくり)とによって、辛うじてかち得たものなのである。」とはいえ、他方で彼らは、時折は贅沢もするし、安易な転職をしてしまうといったこともある。だが、そうした少しの贅沢も許されない生活にあっては、「彼らが温かい衣服にこと欠き、十分な履きものにこと欠いているであろうことは、疑うべくもない事実である。……彼らの多くはその懸命な努力にかかわらず、家賃や保険金を滞り、また、その他の負債を次第にふやしていくのである」(ラウントリ 1975: 8-9)。

このように貧困にある彼らの現実の生活は、「ひとまず」成立しているにすぎないものであった。それは、ひとまずではあれ成立してしまっているため、その困難はなかなか見えにくい。しかし、やはりその成立はひとまずにすぎず、非常に「脆い」。「ひとまず」であれ生活を成立させることだけでも多大なエネルギーを要し、その分、他の部分での「つまずき」や「甘え」を招きやすくなる。

しかしその「つまずき」や「甘え」が、結局は彼らの生活を一層脆くしてしまうという悪循環にある。こうして、安定した家計、リスクに備えた保険や貯金、友人関係を維持する環境、十分な余暇、健康に過ごすこと、こうしたことが徐々に「剥奪」されてしまうのだった。

何らかの政策が貧困を捉えるとき、その「貧困」は人びとの表象を反映している。それゆえ、貧困の理解と把握は決定的に重要となる(青木 2007、岩田 2008)。先進国の貧困の理解がなかなか容易でないならば、その具体像を不断に提示していくことは欠かせない作業である。飢餓の状態になくとも、十分な栄養を得て健康な生活を送ることができているとは限らない。働きながら家を維持することができていても、いつまでも頼りにできるわけではない親や友人からのたびたびの援助により、何とか維持している状態にすぎないかもしれない。最低限の衣服は持っていたとしても、時折のオシャレも楽しむことのできない生活が、あるいは十分な余暇を得られないほど働かなければ暮らしていくことのできないような生活が、先進国にあって「まっとうな最低限」の生活といえるのか。貧困の具体像を提示し、問い続けていかなければならない。

注釈

- 1) ただし、「準社員」(J)や正規雇用(I)の事例も含む。
- 2) Cは恋人と同棲であるが、家賃・光熱費などすべて折半している。同棲による経済的・非経済的な恩恵は大きいであろうが、恋人との家計の独立の程度を考慮して「ひとり暮らし」とした。
- 3) Hは、インタビュー時の2年ほど前より「夜の仕事」に就き月30~50万円稼ぐことになった(1年前までは掛け持ち)。しかしそれまでおよそ3年間、アルバイトとして働いていた。次章以降の分析ではその期間の状態が中心になっている。Lは、調査時点では居酒屋でのアルバイトだったが、まだ勤務期間が1ヶ月にも満たず、またそれまでおよそ3年間同じ職場で働いていたということであり、その期間を

中心に分析した。

- 4) Jはおおよそ半年前、「アルバイト」から「準社員」となったが、時給に大きな変わりはない。「アルバイト」時より収入がよくなったと語っているのは、ひとえに労働時間が増えたからである。
- 5) ここで見るような「旅行」や「引越し」など何らかの(短期的な)目的を持った貯金を「短期的貯金」とした。他の調査から「貯金の目的」を確認しておくと、20代で多く挙げられているのは「病気や不時の災害への備え」「子どもの教育資金」「住宅取得または改築などの資金」「旅行、レジャーの資金」であり、中・長期的な視点のものが多くの特徴である。金融広報中央委員会「家計の金融資産に関する世論調査(平成18年)」より。なお年齢別の結果が公表されているのは、平成18年が最新であった。
- 6) 不安定な家計にある彼らは、たびたび親からお金を「借りる」。これを「負債」とするかは議論のあるところだと思われるが、ここでは、たとえ親(家族)からではあれ自分の力だけで生活費すらまかなえない状況を強調しておくために、「負債」とする。
- 7) Jは高校卒業後、自衛隊として働くが、5年続けた後に辞職、その後専門学校に入学する。その際の学費を、ローンの利用で負担した。また現在は実家にいるが、専門学校在学時はひとり暮らしをしており、その期間に「生活費」として消費者金融やカードローンを数回利用していた。これらの返済が、ここでJの言っている「借金」である。
- 8) 「1日がかかりかそれ以上の遠出」を「旅行」とした。
- 9) 先述の地域流通経済研究所(2009)の調査による若者の「1ヶ月に自由に使えるお金の内訳」では、女性の場合1位は「ファッション費」となっている。また日本経済新聞産業地域研究所(2008)も、「自由になるお金のうち、最もお金をかけているものは何ですか(ひとつだけ)」の質問に対し、女性は「衣料品」がトップである。
- 10) Hについては、2年前時点での状態を述べてきた(注釈3)が、ここでのみ、インタビュー時点での状態を記載している。「入院経験」など、現在の仕事を始めてからの無理な働き方が目立ったためである。
- 11) たとえば、青少年の食生活における栄養摂取の偏

り、欠食の習慣化といった問題は国民的な課題として話題にのぼることは多い(たとえば、内閣府2009など)。

- 12) たとえばコールマン(2003)は、若者の健康を、「リスク・テイキング行動」という視点からも論じている。
- 13) 乾ほか(2009)など。しかし、あくまで就労との関係で論じられることが多く、「健康」という視点から整理されているわけではない。
- 14) これは、「労働時間が1日10時間を超えるほどに長ければ、疲労とストレスがたまり、最悪の場合は死に至ることになる」(森岡2005)と言われる働き方である。
- 15) ただし、表10で記した彼らの労働時間がインタビューした「一時点」でのことに過ぎず、現在は長時間労働でなくとも、「長時間労働経験者」は10例中6例になる。また、インタビュー時点で掛け持ち先を探している最中の事例も2例あった。このように、CとKが特異な例ではまったくないことを断っておく。
- 16) こうした働きすぎは、人並みの生活費を得るためだけであっても生じるが、Hのように困難が重なっている場合は一層追い込まれる。たとえば母子家庭のHは仕事を掛け持ちすることで、母を支え、学費のローンを返済し、さらには妹の大学入学費を負担した。
- 17) ところで、不安定就労と「働きすぎ」については、先行研究では阿部(2007)や本田(2007)があるが、そこでは「やりがい」のある仕事に就くことで長時間働く若者の姿が質的調査によって示されている。しかし本研究が示しているように、彼らの働きすぎの多くはむしろ、単に「家計の不安定」に代表される「生活資源の不足」から生じていると考えたほうが妥当であると思われる。

参考文献

- 阿部真大(2006)『搾取される若者たち—バイク便ライダーは見た!—』集英社新書。
- 青木紀(2007)「社会意識：現代日本の貧困観—相対的貧困像の対置—」、青木紀・杉村宏編『現代の貧困と

- 不平等』明石書店。
- 馬場康彦(2009)「現代の消費・生活様式の特質と貧困」『貧困研究』Vol.3、明石書店。
- J. コールマンほか／白井利明ほか訳(2003)『青年期の本質』ミネルヴァ書房(原著1999)。
- 平岡公一編(2001)『高齢期と社会的な不平等』東京大学出版会。
- 本田由紀(2007)『「くやりがい」の搾取』『中央公論』2007年3月。
- 乾彰夫ほか(2007)「明日を模索する若者たち：高卒3年目の分岐」『教育科学研究』(22)。
- 岩田正美(2008)「貧困研究に今何が求められているか」『貧困研究』Vol.1、明石書店。
- 近藤克則(2007)『検証「健康格差社会」』医学書院。
- 森岡孝二(2005)『働きすぎの時代』岩波新書。
- 内閣府(2009)『平成21年青少年白書』。
- 日本経済新聞産業地域研究所(2008)『20代の消費異変』日本経済新聞社。
- ラウントリー、B. C.／長沼弘毅訳(1975)『貧乏研究』千城。
- シプラー、D. K.／森岡孝二ほか訳(2007)『ワーキングプアアメリカの下層社会』岩波書店。
- 地域流通経済研究所(2009)『若者のライフスタイルと消費行動』。
- 内田龍史(2005)「強い紐帯の弱さと強さ—フリーターと部落のネットワーク」、部落解放・人権研究所編『排除される若者たち』解放出版社。
- (北海道大学大学院教育学院・修士課程)